

<第1回ふるさと探訪>

～松阪・奥伊勢を訪ねて～

村田 和廣（3期生）

読売はばたきシニア倶楽部の活動の一環として、去る4月1日、一泊二日の日程で三重県松阪・奥伊勢を訪ねる小旅行が開催された。この企画は昨年の4月、京都・長岡天神の『つつじを愛でる会』の席上、年に一回程度小旅行をやろうという提案から始められたものである。第1回目は筆者が世話人となり、伊勢市在住の東村篤（第3期生）にサポートをお願いし実施した。

当日午後1時前、昨夜来の雨があがった松阪駅に参加者9人が集合。東村さんのご紹介で、松阪市観光協会の西岡敏男氏（松阪手作り甲冑愛好会会長）にガイドをお願いし、徒歩で松阪城下の名残で、街路が見通せないように三角地を設けたジグザグ道を経て、「三井家発祥地」に着いた。玄関前には鎧、兜姿の戦国武将3人のお出迎えを受け、邸内を見学した。そこには一代にして越後屋の繁栄を築き上げ、また後世の三井財閥の基盤を気付いた三井高利が産湯を使ったとされる石杵の井戸などを見学した。



さらに、三井家の二筋南に国指定重要文化財「旧長谷川邸」が特別開館されていて、伊勢商人を代表する広い屋敷と創業以来大切に保管されてきた生活諸道具や伊勢商人の経営方法やスタイルを解明する貴重な文書類など膨大な資料が展示されていた。

この後、蒲生氏郷公が築いた松坂城址に登り、松坂市街を一望。平年なら満開のお花見ができるはずであったが、残念ながら今年はこちらは咲きで、お城を後にした。

松阪の代名詞は「松阪牛」と「本居宣長」であるが、今回は財政と時間の関係で割愛し、もう一人の故郷の偉人、小津安二郎の青春館に向かった。小津安二郎も「三井」や「長谷川」と同じ「江戸待ち松阪商人」の家に生まれた。子どもは郷里で育てたいという父親の方針で9歳のとき兄と妹2人と共に、母に連れられ移住し19歳までの青春を松阪で過ごした。ことに、旧制中学時代は、近所にあった神楽座という小屋で、校則違反を承知で何度も映画を見た事が小津映画を産み出したといわれる。”人生を決めた松阪の10年”である。この経緯を纏めたビデオを観賞して、一路、宿泊地奥伊勢フォレストピアに向かった。



このホテルは松阪から国道42号線を1時間ほど南下した宮川沿いの天然温泉の湧く山荘ホテルである。今月はこのホテルの開設20周年で地元の人を集めてのイベントが予定されていた。午後5時前に到着。旅装を解いて<美人の湯>、<美肌の湯>として親しまれている温泉にゆっくりとつかって、午後六時半から夕食懇親会をはじめた。冒頭、今年1月に急逝した第2期生の内田道成氏のご冥福を祈って献杯をした。内田さんはこの小旅行を楽しみにされており、昨年未の納会では率先して参加表明してくれただけに、ご一緒できなくなって、残念なことになってしまった。

このホテルの料理は地元の食材をふんだんに使ったフレンチで魚は熊野灘産、肉は別注すれば松阪牛もあるが、地元の猟師が獲った猪肉や鹿肉のジビエも堪能できるシステムになっている。懇親二次会は別棟のコテージに場所をかえ、飲むほどに語るほどに盛り上がり、夜の更けるのも忘れて論議に花を咲かせた。

翌日は爽やかに晴れ上がり、朝食はお粥と葉膳の副菜。飲みすぎた体にはうってつけのメニューである。出発時間まで山荘の周りの大自然を満喫し、滝原宮へ向かった。

午前10時半頃滝原宮前の「道の駅 木つつき館」に到着。東村さんのご紹介で、中瀬秀夫さんのお出迎えを受けた。中瀬さんは郷土 大紀町の文化財調査委員をされる郷土史家で、滝原宮の案内ボランティアをされている。当初30分の参拝予定が一時間以上にわたって熱心なご説明を受けた。滝原宮は伊勢神宮に属する最も古い



歴史を持つ「大神の遥宮」で、天照坐皇大御神御魂を祭る。宮域が44ヘクタールあり、古代そのままの原生林が生い茂り凜とした空気に包まれていた。なかでも、「ねじれ杉」がパワースポットとして知られている。

そして、計画では、桜の名所大滝峡で花見の予定であったが、あいにくまだ2、3分咲きなので、急遽、地元では早咲きの桜で有名な隣町の柏崎に向かった。予想的中。樹齢150年以上の一本の老木であるが、大滝の飛沫がほとぼしるような満開の枝垂れ桜を見物したあと、筆者の母校 滝原中学（現大宮中学）を車窓から眺めながら昼食場所に向かった。

午後は地元のお土産がある「道の駅 おおだい」で大内山酪農のバター、チーズケーキ、プリンや紀州の干物、海産物、それに名産伊勢茶、山菜などを買い求め、一路、松阪へ戻った。

故郷を発して50年。気のおけない"戦友"との思い出深い旅となった。今や、両親も生家もお墓も学び舎も田舎には無くなってしまっているが、懐かしい川や山は昔の姿のまままで迎え入れてもらった。ふと口ずさんだ詩は

『ふるさととは遠きにありて思ふもの そして悲しくうたふもの

よしや うらぶれて異土の乞食（かたゐ）となるとても 帰るところにあるまじや
ひとり都のゆふぐれに ふるさとおもひ涙ぐむ

そのころもて 遠きみやこにかへらばや 遠きみやこにかへらばや』

室生犀星「小景異情—その二」より



【第1回ふるさと探訪参加者】



木口特次（10期生・後列左より2人目）、住田道徳（4期生・前列左より1人目）、田中孝生（0期生・前列右より2人目）、中村憲三（2期生・前列左より2人目）、東村篤（3期生・後列左より1人目）、村田和廣（3期生・前列右より1人目）、山崎雅視（4期生・後列右より1人目）、山本千秋（2期生・右より2人目）、山本政信（5期生・後列中央）
（敬称略・五十音順）